

華北駐屯軍と日中関係

櫻井良樹(麗澤大学)

1. 華北駐屯軍とは何か

「支那駐屯軍」/1937年盧溝橋事件

義和団事変後の北京最終議定書(辛丑和約 Protocol) / 「清国駐屯軍」1901年
議定兵力と駐屯地点(北京と天津 山海関 秦皇島を含む12地点)

横浜にも駐屯していた英仏駐屯軍(1863-1875)

華北駐屯軍の特殊性……条約にもとづく/国際協定

『華北駐屯日本軍』で明らかにしようとしたこと

日本駐屯軍の機能変化/華北駐屯列国軍との関係

2. 内容に関して

華北駐屯軍の兵力変遷

駐屯軍の機能

邦人保護、交通維持/圧力手段/情報収集 謀略/華北分離後には戦区全体の治安維持

a) 自発的に(内在的に)変わったのか……本質的なものが露呈していく、時代を主導していく

b) 他の要因(国際環境、日本の変化、満洲との関係、中国の対応)によって変質したのか

華北駐屯日本軍としたことから発生した利点……列強各国の駐屯軍のことを比較 意識できる

変質 変化「平和維持のための国際軍の一部から戦うための軍隊へ」編集例

1931年11月9日、天津事件の際の司令官会議での香椎司令官の発言

“I thought that we shall be able to maintain the principle of international solidarity for the
maintenance of the peace of Tientsin”

国際軍的性格を有する駐屯軍

3. 具体的な変化

①華北駐屯軍の創設……中国をめぐる国際協調体制の一要素の形成

②創設当初からしばらくの日本の思惑……駐屯する利益よりも列強軍が存在しない方がよい

③1911年辛亥革命……駐屯軍の意義の再確認と増兵、鉄道保護協定(1911)、アメリカ新規参加、
京津地方の治安維持機能

④第一次世界大戦勃発……日米軍の重みの高まり、独逸露軍の撤退

⑤1920年代の中国内戦激化……列国軍協同防禦計画(1924年)、国際共同管理論、1927年まで

⑥同時期の日本の対応……減兵と撤退提案による主導権巻き返し

⑦1927年の北伐……共同増兵措置、第一次山東出兵

⑧1928年の北伐……日本だけの第二次山東出兵、中国の「革命外交」

⑨1931年満洲事変……日本駐屯軍の単独行動、1931年11月天津事件、1933年1月山海関事件

⑩1935年華北分離政策……日本駐屯軍の新任務、自治政権のための軍事力、1936年大増強

⑪1937年7月盧溝橋事件……8月末の日本駐屯軍廃止

4. 1930年代の日本駐屯軍の変質

列強は中国の革命外交を黙認=議定書の機能低下

華北分離段階になると日本も議定書の権利を持ち出さなくなる……独自任務

日本駐屯軍の本質の違い(他国との違い)

中国との地理的な近さ/列強諸国の関与を嫌う側面/アジア モンロー主義

列国華北駐屯軍兵力推移（ベルギー・オランダを除く）

時 期	イギリス	フランス	日本	アメリカ	ロシア	ドイツ	イタリア	オーストリア	合計	出典
1900年8月10日	6,000	3,500	22,000	3,127	12,374	300	42	73	47,416	1)
各国の最大兵力	33,450	20,000	22,750	4,636	23,000	21,500	3,000	400	128,736	2)
1900年12月下旬	14,300	16,650	10,874	1,700	7,590	20,650	2,541	423	74,728	3)
1901年6月頃	6,600	4,000	不記載	150	2,000	5,208	1,300	300	—	4)
議定兵力（過渡）	2,550	2,600	2,600	150	600	2,600	900	200	12,200	5)
（平常）	1,600	1,650	1,650	150	600	1,650	700	200	8,200	6)
1902年1月31日	4,720	2,400	1,400	150	1,020	3,250	1,050	150	14,140	7)
1902年10月30日	2,000	1,720	不記載	150	990	2,050	750	210	—	8)
1903年5月	2,177	1,731	1,627	105	207	2,054	283	181	8,365	9)
1905年6月	2,129	1,968	1,210	146	299	2,088	310	219	8,369	10)
1906年7月1日	2,195	1,665	1,242	110	299	761	247	219	6,738	11)
1908年5月	1,836	1,253	1,240	131	118	751	230	218	5,777	12)
1909年2月末	1,901	1,333	555	147	36	754	233	216	5,175	13)
1910年3月	1,962	1,351	466	134	36	148	215	35	4,347	14)
1911年2月	1,882	1,047	528	158	36	147	238	42	4,078	15)
1911年11月1日	2,919	1,120	504	228	223	146	225	42	5,407	16)
1911年12月14日	2,840	1,315	1,216	321	585	356	194	125	6,952	17)
1912年2月3日	2,840	1,319	1,253	821	583	358	195	125	7,494	18)
1912年3月31日	2,846	1,481	2,475	1,790	1,090	454	189	146	10,471	19)
1913年9月30日	2,841	1,400	1,776	1,573	1,100	454	221	122	9,487	20)
1914年6月	2,941	1,270	1,772	1,137	51	468	210	83	7,932	21)
1914年10月	2,003	430	1,049	1,117	50	—	215	—	4,864	22)
1915年3月	482	498	600	1,447	50	—	210	—	3,287	23)
1916年10月1日	738	970	1,137	1,670	42	221	34	113	4,925	24)
1918年7月1日	627	1,303	1,131	1,253	4	—	29	—	4,347	25)
1919年10月16日	810	1,070	1,149	1,367	3	—	85	—	4,484	26)
1921年10月	1,050	1,300	1,100	1,490	—	—	40	—	4,980	27)
1922年5月4日	662	1,368	1,146	918	—	—	66	—	4,160	28)
1923年10月13日	757	1,525	606	1,273	—	—	50	—	4,211	29)
1925年年末頃	1,032	1,751	532	1,303	—	—	450	—	5,068	30)
1926年5月1日	1,007	1,574	824	1,436	—	—	370	—	5,211	31)
1927年7月19日	1,800	2,400	1,300	4,000	—	—	610	—	10,110	32)
1928年3月1日	1,943	2,931	1,350	4,468	—	—	466	—	11,158	33)
1928年6月10日	1,924	2,958	6,187	4,474	—	—	487	—	16,030	34)
1929年6月30日	1,854	2,087	898	1,440	—	—	419	—	6,698	35)
1931年5月	971	1,971	844	1,465	—	—	405	—	5,656	36)
1932年9月1日	1,002	2,010	1,897	1,348	—	—	420	—	6,677	37)
1933年3月31日	996	1,920	1,914	1,304	—	—	472	—	6,606	38)
1934年7月1日	995	1,926	1,885	1,242	—	—	334	—	6,382	39)
1936年1月31日	986	1,713	2,005	1,329	—	—	381	—	6,414	40)
1936年6月1日	973	1,848	3,972	1,349	—	—	395	—	8,537	41)
1937年1月31日	999	1,839	4,080	1,257	—	—	384	—	8,559	42)
1937年7月1日	1,007	1,785	4,096	1,274	—	—	406	—	8,568	43)
1938年1月1日	962	1,994	—	1,348	—	—	409	—	4,713	44)
1940年6月頃	170	30～240	—	350	—	—	130	—	880～890	45)
1941年8月頃	—	443	—	289	—	—	187	—	919	46)

出典 1,2)『清国事変戦史』。3,5,9,18,20)「義和団関係北支駐屯軍隊関係一件」。4)『外邦測量沿革史』。6)『天津誌』。7,8)「清国事件書類」。10,11,12,21,22)FO228/2256-2257・2259。13,26,29,33,38,40,42)「密大日記」。14,15,16,17,23,24,25,27,30)FO371/863・1088・1338・2330・2695・3396・11679。19)「清国革命動乱ノ際ニ於ケル列国陸海軍動静一件」。28)「公文備考」。31)「英修道関係文書」北九州市立大学蔵。32)『日本外交文書』。34)「陸支密大日記」。35)RG395.8 #5960 Box37。36)「北支那地方に於ける列国勢力の概要」(文庫-宮崎-63)。37,39,41,43,44)WO106/104。45)『東京朝日新聞』1940年6月12日。46)FRUS 1941,vol.5。46)FRUS 1941,vol.5